

細胞検査士の教育の現状と将来 細胞検査士の育成と問題点

◎南雲サチ子¹⁾

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻がん教育研究センター¹⁾

【はじめに】

細胞診は癌の早期診断と治療への応用にきわめて重要な検査法です。癌のスクリーニング目的では、子宮頸がん検診や肺がん検診の喀痰細胞診等があり、癌の診断と治療目的では、組織型の推定やその後の検査等が重要となります。細胞診検査を正しく行うには、細胞検査士資格取得とその後の多くの知識と経験が必要です。ここでは細胞検査士養成コースの現状と課題、細胞診検査の将来等について述べたい。

【資格認定試験の受験資格と養成機関】

細胞検査士資格認定試験の受験資格には、①臨床検査技師または衛生検査技師の資格取得後、主として細胞診検査実務に1年以上従事したもの。②臨床検査技師または衛生検査技師の資格を有し、日本臨床細胞学会認定の細胞診技術者養成機関卒業見込み者又は卒業生、となっている。

細胞検査士資格試験の受験者の多くは、①の医療検査現場で実務経験を積みながら学ぶ技師ですが、②の細胞診技術者養成機関で所定の教育課程を履修して受験資格を得る技師も多くみられるようになりました。

現在の細胞検査士養成課程は多様になって来ています。②の日本臨床細胞学会認定のコースには、2通りみられる。一つは臨床検査技師を対象に7ヶ月間養成するコースで現在2つある。もう一つは1990年代以後、医療短大の4年生大学への改組・大学院設置等の医療スタッフ全体の教育体制改革が進み、その中で細胞検査士養成課程を設け、学部4年間の教育で臨床検査技師と細胞検査士の両方資格取得を目指す大学が出てきて（4年制大学の細胞検査士養成課程）現在8校ある。また日本臨床細胞学会認定コースではないが、2007年から開始された文部科学省がんプロフェッショナル養成プラン（以後がんプロ）の中で、大学院教育で養成される細胞検査士も出てきて、現在2つある。

【細胞診技術者養成機関の利点と課題】

細胞診技術者養成機関のどのコースも病理・細胞診断学等についての系統だった講義・実習がなされてお

り、これは大切なことです。細胞検査士養成所（7ヶ月コース）では、臨床検査技師の有資格者の養成コースであるので重要と考えられますが、課題としては地域に偏りがみられることがある。4年制大学の細胞検査士養成課程では、臨床検査技師と細胞検査士の両方資格取得（ダブルライセンス）を特徴としているが、細胞検査士認定試験の受験者は臨床検査技師の資格のない受験者であること（これは日本臨床細胞学会が認めていても）が大きな課題とされます。これは厚生労働省の医療従事者の専門性資格（将来的に）として認められないことにつながるのです。しかし現在、ダブルライセンスを目標にした医療大学が増えつつあります。「がんプロ」大学院での細胞検査士の養成目的は、分子生物学的解析法を含めた高度な医療技術・チーム医療・情報化・国際化等に対応できる細胞検査士の養成を目指した教育を行うことです。実際には大学院博士前期課程に位置づけられ、本課程に2年以上在学し所定単位を修得し、必要な研究指導を受け、修士論文の提出と審査に合格しなければなりません。「がんプロ」細胞検査士コースは「がんの時代」のニーズに応じた養成機関として重要と考えられる。しかし、課題は養成人数が少ない、大学での指導教員の確保が難しい（人的、経済的）などから全国的に大学院での細胞検査士養成コースが増えないなどがあげられます。

【細胞診検査のこれから】

癌のスクリーニングとして用いられている子宮頸癌検診は、将来は1次スクリーニングには遺伝子検査が応用されようとしており、肺門部の早期肺癌は禁煙運動等の成果で激減したことにより喀痰細胞診の意義も減りました。したがって細胞診検体を多量に扱うスクリーニングの時代は過ぎようとしています。しかし、癌の罹患数は増え続けている現在、早期診断と治療のための細胞診はますます重要となり、がんの時代のニーズに応じられるような細胞検査士が求められています。そして細胞検査士資格が厚労省の専門性資格として認められる教育や組織のあり方も重要と考えます。